

中学生における達成動機と過去の諸経験との関係

The Relationship between the Achievement Motive and Past Experiences in Junior High School Students.

阿部 信弘 (聴講生)・宮下 一博

Nobuhiro ABE and Kazuhiro MIYASHITA

目 的

「障害を克服してできるだけよく、かつ速やかに課題を解決しようとする欲求」を達成動機という(竹中, 1978)。McClelland & Winter (1969)によれば、達成動機の高い人は、「個人的責任の受容、適度な危険への挑戦、自分の活動やその結果についての情報への関心、精力的な活動」などの特性を示すとされている。本稿では、達成動機の形成に影響を与えると考えられる幾つかの要因の検討を行い、いかにすれば達成動機の高い子どもを育成できるかについて考察することとした。

この種の研究として、Crandall(1963)は、達成動機の先行条件として、社会文化的要因、親の影響、及び学校での経験などの要因を挙げている。また、波多野・稲垣(1981)は、無力感や効力感の研究の中で、意欲的に生きる上で大切なこととして、行動の源泉が自分にあると感じることや自己がもつ有能さを感じることを挙げている。

本研究では、これらの研究をもとに以下の5つの「経験」をとりあげ、中学生を対象にそれらの経験の程度と達成動機との関係を検討することを目的とした。「経験」のカテゴリーとしては、①自己の行動が外的な報酬や評価に左右されてきたと感じる「外的評価に統制された経験」、②何かを選択するに当たって自分が選んできたと感じる「自己選択感の経験」、③他者に役立ち必要とされてきたと感じる「他者に好ましい影響を与えた経験」、④自己の行動に関する「成功感の経験」、⑤他者との心のふれあいや信頼感などの「他者との暖かな心理的交流の経験」の5つが取り上げられた。

方 法

被 験 者 東京都足立区立O中学校1年生3学級合計129名(男子68名,女子61名)。

質 問 紙

(1) 過去の諸経験を測定する質問紙

波多野・稲垣(1981)他を参考にして作成した32項目を、「かなりあてはまる」～「ほとんどあてはまらない」の5段階で評定させた。各経験のカテゴリーの項目数は以下の通りである。

- ①外的評価に統制された経験(5項目)
- ②自己選択感の経験(7項目)
- ③他者に好ましい影響を与えた経験(7項目)
- ④成功感の経験(5項目)

⑤他者との暖かな心理的交流の経験（8項目）

(2) 達成動機を測定する質問紙

下山（1974）が作成した“Achievement Motive Scale”の18項目を、同様に5段階で評定させた。

実施方法

上記2種の質問紙を冊子とし、各学級担任に依頼して学級単位で実施した。その際、質問紙(1)については、各項目に対し生活上の時期を特に限定せず、「現在に至るまでの経験を総合して回答する」よう教示した。また、質問紙(2)では、現在の自分について回答するよう教示した。

実施時期 1986年11月下旬。

結果の処理法

質問紙(1)では、各カテゴリーの項目とも、その程度が高いほど高得点となるように5～1点を付与した。質問紙(2)でも同様に、各項目とも達成動機が高いほど高得点となるよう5～1点を付与し総得点を算出した。

なお、質問紙(1)では、5つの経験のカテゴリーごとに、各項目とそれを除く項目の得点の総和との相関係数を算出し、Table 1に示した（項目分析）。この結果により、負の相関のもの及

Table 1 過去の諸経験を測定する項目とその項目分析の結果（N=129）

	項 目	r
外的に統制された経験	1. 私はこれまでごほうびを期待して行動することが多かった。	.218**
	2. 私の家では、これまで私がテストでいい点をとると、たいてい何か買ってくれた。	.563**
	3. 私の成績が上がると、何か買ってもらえることが多かった。	.593**
	4. これまで授業では、先生に良く思われようと気をつかっていた。	.007
	⑤† 私はこれまで他の人からどう思われるかよりも、自分がどう思うかを中心に考え行動してきた。	-.177*
自己選択感の経験	6. 私はこれまで私にとって大事なことは、自分で考え決めてきた。	-.009
	⑦ 私はこれまでたくさんものの中からひとつを選ぶときには、自分なりに考えて選ぶというよりも、他の人にまかせてしまうことが多かった。	.286**
	⑧ 私の親はこれまで私が何かしようとする時、いつも口出しをしてきた。	.297**
	⑨ 私はこれまでたいてい親や先生の言うままに行動してきた。	.150*
	⑩ 私はこれまで自分の意志でものごとの決断をしたことはあまりなかった。	.330**
	⑪ 私はこれまでまわりから「こうしなさい」と強制されることが多かった。	.347**
	⑫ 私の親はこれまで私の好みを考えず、親の好みをおしつけることが多かった。	.318**
他者に好ましい影響を与えた経験	⑬ 私はこれまで他の人から頼りにされることはほとんどなかった。	.154*
	14. 私はこれまで私の仲間から必要とされてきた。	.188*
	15. 私はこれまで家の中で役に立つ存在であった。	.196*
	⑯ 私はこれまで仲間の役に立つようなことはあまりしたことがなかった。	.290*
	⑰ 私のしたことが家の人から感謝されたり喜ばれたりすることはそれほどなかった。	.287**
	18. 私のすることの多くはこれまで他の人に何らかの影響を与えてきた。	-.066

中学生における達成動機と過去の諸経験との関係

	⑱ 私が何かしてもまわりの人はそれをあまり気にとめてくれなかった。	.244**
成功 感の 経験	20. 私はこれまでテストでは、わりといい成績をとってきた。	.316**
	㉑ 私はこれまでスポーツではほとんど失敗ばかりしてきた。	.253**
	㉒ 私はこれまで勉強では「ついていけない」と思うことがほとんどだった。	.424**
	23. 私はこれまで勉強していて、「わかった!」と感じることがよくあった。	.263**
	㉔ 私はこれまでいつも失敗ばかりで、「成功したな」と感じたことはほとんどなかった。	.420**
他者との 暖かな 心理的 交流の 経験	25. これまで親は私の気持ちを考えてくれてきた。	.420**
	㉖ 何か悪いことがあると、私のせいにされることが多かった。	.144
	27. 私にはこれまでに悩みごとを打ち明けられる親友がひとりくらいはいた。	.283**
	28. 私はこれまで仲間といっしょにいるのがとても楽しかった。	.347**
	㉙ 私はこれまで家族の人といっしょにいても何か落ちつかなかった。	.427**
	30. 私はこれまで人の心のやさしさにふれたことがある。	.436**
	㉚ これまで学校には気の合わない人ばかりで楽しくなかった。	.380**
32. 私の先生や仲間はこれまで私を信頼してくれた。	.394**	

† ○印は逆転項目 ** $p < .01$ * $p < .05$

び相関が有意に至らなかった5項目(No.4, 5, 6, 18, 26)を除外し、各カテゴリーごとに合計得点を算出した。

以下、分析Iでは、質問紙(1)の各カテゴリーと「達成動機」との関係ピアソンの積率相関によって、また、分析IIでは重回帰分析によって検討した。

分析 I

質問紙(1)の5種の「経験」のカテゴリーの得点と達成動機得点とのピアソンの積率相関係数を、男女別ならびにそのトータルについて算出し、Table 2に示した。

Table 2 過去の諸経験のカテゴリーと達成動機との相関係数

	外的評価に統制された経験	自己選択感の経験	他者に好ましい影響を与えた経験	成功感の経験	他者との暖かな心理的交流の経験
男子 (N=68)	-.305**	.443**	.276*	.402**	.018
女子 (N=61)	.056	.347**	.283*	.583**	.555**
全体 (N=129)	-.126	.404**	.247**	.519**	.263**

** $p < .01$ * $p < .05$

これによれば、まず男子では、「他者との暖かな心理的交流の経験」において有意な相関が得られなかった以外は、すべて相関係数は有意であった。すなわち、「外的評価に統制された経験」が少ないほど、また、「自己選択感の経験」や「他者に好ましい影響を与えた経験」、「成功感の経験」が大きいほど達成動機の程度は高かった。

これに対し、女子では、男子で有意な相関が得られた「外的評価に統制された経験」では相

関は有意ではなく、逆に男子において有意でなかった「他者との暖かな心理的交流の経験」の категорияとの間に有意な正の相関が認められた。他の3つのcategory、すなわち、「自己選択感の経験」、「他者に好ましい影響を与えた経験」、「成功感の経験」では、男子と同様に正の有意な相関係数が得られた。

また、男女込みの全体のサンプルでは、女子で得られたものと全く同様の結果を示した。つまり、「自己選択感の経験」、「他者に好ましい影響を与えた経験」、「成功感の経験」、及び「他者との暖かな心理的交流の経験」の4つのcategoryと達成動機との間に有意な正の相関が認められた。一方、「外的評価に統制された経験」と達成動機との関係は有意ではなかった。

考 察

以上の結果から、本研究で設定した「経験」の諸categoryは、達成動機とかなり関係をもっていることが示された。

5つのcategoryを順に検討すると、まず、「外的評価に統制された経験」では、男子においてのみ達成動機と負の有意な相関が見られた。すなわち、男子では、自己の行動が外的報酬などで統制されてきたと感じる者ほど達成動機は低いという結果であった。

「自己選択感の経験」及び「他者に好ましい影響を与えた経験」、「成功感の経験」の3つのcategoryでは、男女別ならびに男女込みの全体のいずれにおいても、有意な正の相関係数が認められた。自らの意志に従って自らが決断し、また、他者にとっても自分にとっても自分という存在が重要で価値のある存在であると感じられてきたか否かが、達成動機のあり方に強く影響を及ぼすことが示された。殊に、「自己選択感の経験」や「成功感の経験」では他のcategoryに比べて相関係数の値は高く現れ、達成動機とより密接に関係していることが示されたと言えよう。この点については、分析IIの重回帰分析の結果とも合せて考察したい。

「他者との暖かな心理的交流の経験」のcategoryについては、男子では有意な相関は得られなかったものの、女子及び男女込みの全体のデータにおいて有意な正の相関が見出された。このことは、女子では、他者との暖かな心理的交流によって情緒的安定感もたらされ、これが達成行動に影響を及ぼすと考えられるかも知れない。これに対して男子では、こうした人間関係の側面は達成動機とは切り離されて認知されている可能性がある。女子の場合では、達成動機を高める上で、成功感の経験を与えると共に、人間関係を調整することの重要性が示されたと言えよう。

以上、単純相関による分析を行い、本研究で取り上げた5つの過去経験のcategoryとも、達成動機にかなり影響を与える要因であることが示された。続く分析IIでは、多変量解析による検討を行った。

分 析 II

達成動機得点を従属変数、5つの「経験」のcategoryの得点を独立変数として、男女別ならびにその全体について重回帰分析を行い、その結果をTable 3にまとめて示した。

重相関係数の値は、男子では、.603 ($F=7.07$, $df=5/62$, $P<.01$), 女子では、.637 ($F=7.51$, $df=5/55$, $P<.01$), 男女込みの全体のデータでは、.589 ($F=13.09$, $df=5/123$, $P<.01$) であり、いずれも1%水準で有意であった。このことは、本研究で設定した、「経験」のcategoryがかなり妥当であったことを示していると言えよう。

次に、標準偏回帰係数の高い方から順に幾つか挙げると(絶対値.100以上)、男子では、①成

Table 3 重回帰分析の結果

過去経験 の 카테고리	男 子 (N=68)		女 子 (N=61)		全 体 (N=129)	
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数	偏回帰係数	標準偏回帰係数
外的評価に 統制された経験	-.709	-.194	.219	.064	-.214	-.059
自己選択感の 経験	.852	.341	.349	.124	.735	.273
他者に好ましい 影響を与えた経験	.168	.058	-.306	-.087	<.001	<.001
成功感の経験	1.050	.346	1.038	.391	1.267	.449
他者との暖かな 心理的交流の経験	-.292	-.137	.553	.281	-.028	-.014
重 相 関 係 数	R = .603		R = .637		R = .589	

功感の経験, ②自己選択感の経験, ③外的評価に統制された経験, ④他者との暖かな心理的交流の経験の順であった。また, 女子では, ①成功感の経験, ②他者との暖かな心理的交流の経験, ③自己選択感の経験が, 男女込みの全体では, ①成功感の経験, ②自己選択感の経験の順であった。

考 察

ここで得られた標準偏回帰係数の大きさ, ならびに順位は, 分析 I の単純相関による分析の相関係数のそれとほぼ対応する結果であった。つまり, 男子では, 「成功感の経験」や「自己選択感の経験」がとりわけ達成動機の育成に大きな寄与をなしていることが示された。また, 女子では, 「成功感の経験」に加えて, 「他者との暖かな心理的交流の経験」がかなり高い寄与を示していることが明らかにされた。

しかし, 「他者に好ましい影響を与えた経験」については, 単純相関ではすべて有意な相関が得られたにもかかわらず, 重回帰による分析ではごく小さい寄与を示すにとどまった。この変数の達成動機への絶対的な寄与はかなり小さいと結論づけてよかろう。

以上のように, 達成動機に及ぼす変数の寄与には若干の性差が認められたが, こうした性差を認識した上で達成動機の育成に努めることも必要なことかも知れない。とりわけ, 「他者との暖かな心理的交流の経験」は, 女子では正の高い寄与を示しているのに対して, 男子では, それほど高いとは言えないが逆に負の寄与を示している。この点に関連したことは, 先に若干の考察を行ったが, 興味深い点でもあり今後の検討課題としたい。

引用文献

- Crandall, V. J. 1963 Achievement. In H. W. Stevenson et al. (Eds.), *Child psychology*. NSSE, 416-459.
 波多野諄余夫・稲垣佳世子 1981 無気力の心理学 中央公論社
 McClelland, D. C., & Winter, D. G. 1969 *Motivating Economic Achievement*. New York : Free Press.

- 下山剛 1974 Achievement Motive Scale 宮本美沙子(編著) 達成動機の心理学 1979 金子書房 Pp.183
—184.
- 竹中治彦 1978 達成動機 藤永保他(編) 心理学小辞典 有斐閣